

令和 4 年 5 月 19 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00627

研究課題名(和文) 複雑性を指標とする日本語諸方言の類型論的研究

研究課題名(英文) A Typological Study on the Complexity of Japanese Dialects

研究代表者

渋谷 勝己 (Shibuya, Katsumi)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：90206152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：近年、他言語と頻繁に接触を繰り返してきた言語(英語やスペイン語など)は体系や構造が単純になる傾向があると主張がなされている。本研究課題はこの動向を踏まえ、日本語のいくつかの方言を、他方言との接触の度合いという観点から分類し、それらの方言の間に複雑度の違いがあるかを検証した。

結果、方言のうち他方言との接触があまりない方言は独立した文法要素が連鎖する分析的な特徴を持ちつつも、そこに複雑な音声規則がかぶさって標準語とは異なった表層の形をとりがちであること、都市部の、他方言との接触が多い方言の文法要素は、分析的でありつつも、その文法的な特徴をより強める傾向があること、などを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術面では、日本の周辺部の方言と都市部の方言の形態統語的な特徴を、複雑性という指標で整理することによって、日本語の方言に特徴的に観察される社会言語類型的な傾向性を指摘し、この分野の国際的な対話を促進する材料を提供した。

また社会的には、未だに流布している、「言語には、未開の言語と、高度に発展した文明の言語がある」、あるいはその反動としての、「すべての言語の複雑度は等しい」といった、いずれも偏った言語の認識を是正する役割を担うものである。

研究成果の概要(英文)：Recent sociolinguistic typology addresses that languages such as English and Spanish that repeatedly had contact with other languages tend to be simplified in their systems and structures. Based on this line of study, the present study aimed to verify this hypothesis through the classification of Japanese dialects into traditional and contact varieties and the analysis of their systems and structures from the viewpoint of language complexity.

The results include: those socially isolated traditional dialects tend to have analytic grammatical items that are independent from each other and to be arranged sequentially on which (morpho-)phonetic rules apply and change the surface structure of their forms, while the grammatical items of urban dialects that experienced dense contact with other dialects are essentially analytic in nature but tend to extend/more grammaticalize their meaning.

研究分野：日本語学

キーワード：方言類型論 複雑性 標準語

1. 研究開始当初の背景

(1) 開始時までの国内の研究動向

日本語諸方言の音声・音素やアクセント、文法など、個別の事象の記述や変化の研究に取り組んできた研究者は、その研究の過程において、音素の数やアクセントの型が多い方言と少ない方言、音融合を盛んに進める方言とそうでない方言、活用が複雑な方言とそうでない方言、アスペクトやテンス、可能表現などにおいて意味を細かく分けて表現する方言とそうでない方言などがあることに気づき、それぞれの事象ごとに全国分布図等を作成しつつ、当該事象の類型化や変化のプロセスを解明することを試みてきた。このうち個別事象に関する類型化の成果は、音韻についてはたとえば『日本方言大辞典 下巻』(1989)所収の音韻総覧などに見ることができ、他の事象についても、可能表現を対象とした渋谷勝己「日本語可能表現の諸相と発展」(『大阪大学文学部紀要』33-2, 1993)、授受表現を対象とした日高水穂『授与動詞の対照方言学的研究』(2007)、主にアスペクト・テンス体系を対象とした工藤真由美編『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』(2004)などにおいて研究が進められた。一方、日本の方言学は、伝統的に、複数の地図や等語線を重ね合わせるという技法をもっており、個別に解明された事象を総合する試みも行ってきた。この重ね合わせの技法は、方言区画論や(日本ではあまり発展していないが)方言圏の研究などに顕著である。本研究課題は、以上のような個別の方言事象の記述や変化を追究した研究が涵養してきた類型論的な視点を抽出し、それに、個別の事象を個別に留めず、諸事象を重ね合わせて見るという技法を追加、さらに、諸事象を統括する「複雑性(complexity)」という視点を組み合わせることによって構想したものである。

(2) 開始時までの国外の研究動向

国外においては、接触を重ねてきた言語と伝統社会で使用されてきた言語、都市部の方言と村落部の方言の対照研究等を通じて、言語の体系的平等性という神話に疑問が表明され、言語には複雑さの度合いがあり、それはその言語が使用されてきた社会的な状況や形成過程と連動するというアイデアが展開されている(McWhorter, J.H. *The world's simplest grammars are creole grammars*, *Linguistic Typology* 5, 2001, Dahl, U. *The Growth and Maintenance of Linguistic Complexity*, 2004, Trudgill, P. *Sociolinguistic Typology*, 2011など)。この研究のなかで重要な点は、ある言語のもつ複雑性の度合いは、その言語が経験した言語接触の度合いと相関する/因果関係があるという指摘にある。このような指摘は、部分的には日本の方言研究界でも行われてきたところであり、これらの海外の研究と連携する下地は整っていた。

(3) 国内外の研究の統合に向けて

本研究課題は、このような状況を承けて、日本の方言研究者が事象ごとに認識していた方言の複雑性に関する直感と、国外の複雑性をめぐる社会言語類型論的な研究をリンクさせ、両者の止揚、発展に寄与する研究を企画したものである。具体的には、体系と構造、使用される社会状況が大きく異なるさまざまな言語を比較するよりも、言語の「複雑性」と「言語接触の度合い」の相関を比較的明確に描き出すことができるとされる日本語のなかの地域的変種(=方言)の言語実態と使用状況を比較することによってこの領域の研究を推進し、今後さらに精緻に展開するための方法を開発することを企図した。

2. 研究の目的

本研究課題では、たがいに関連する次の4つの課題を、総合的に追究した。これまで蓄積されてきた記述を総合し、諸方言(標準語を含む)を、複雑性という指標によって類型化することを主眼としたもので、(1)~(3)を中心課題とした。

- (1) 日本語諸方言はどのような指標によって、どのように類型化されるか。
- (2) そのような類型は、複雑性(complexity)という点からどのように整理されるか。
- (3) そのような類型は、個々の方言が使用される社会的状況とどのように連動するか。
- (4) そもそも人間は、どのようにして方言のシステムを作り上げるのか。

具体的には以下のとおりである(以下の項目番号は上に対応)。

(1) 日本語諸方言の類型化

日本の各地で使用される方言は、その特徴をできるだけ網羅的、総論的に整理することを目的とした初期の記述的研究や、その蓄積を踏まえて調査、分析、刊行された国立国語研究所『日本言語地図』と『方言文法全国地図』、さらにはその後積み重ねられた個別事象の詳細な記述研究等によって、音素目録、音節・アクセントの型、形態、格、あるいは述語の各文法カテゴリーの分節のあり方などが解明され、大局的な観点からする類型化を行うことが可能な段階に達している。たとえば、アスペクトについては西日本諸方言が、テンスについては東日本諸方言が、より細かく分節を行っていることが明らかにされた。話しことばである方言の世界で多様に発達している終助詞についてもようやく研究が進展し、各地方言の終助詞の詳細な記述が行われるようになった。本研究課題は、これらの記述を総合し、日本語諸方言を類型化することを試みたものである。

(2) 複雑性を指標にして行う類型論

大局的な観点から行う類型論とはいっても、統合する視点がなければ個々の文法事象のリストアップにとどまる。その結果得られる類型化も方言のグループ化にとどまり、その類型を作り出す根本的なメカニズムは明らかにできない。本研究課題ではその統合する視点を、「複雑性」においた。複雑性とは、たとえば形態面の場合、複合度（複合・派生形式か単独形式か）、透明度（融合形式か分析的形式か）、規則性（不規則形式を含むか否か）などを基準にして測定される言語の特徴である（カッコ内の前者がより複雑）。近代の言語学においてはこれまで、「すべての言語（方言を含む）は体系・構造面で平等＝複雑度は同じである」ということをテーゼとして研究を進めてきた。個々の言語ごとに、「音素面では単純でも文法面は複雑である」、「形態的には複雑でも統語面は単純である」といったことはありえても、ひとつの言語の事象すべてを総合すれば、すべての言語はほぼ同じように複雑であるとする考え方（等複雑性の仮説）である。この考え方は、近代言語学の発達以前に流布していた、文明の言語、未開の言語といった根拠のない言語観を払拭するのに大きく貢献した。しかし、近年、とくにクレオールやコイナー（異なる方言を使用する話者の接触によって生じる共通語）などの接触言語の研究が進むにつれて、より複雑な言語や、より単純な言語といったものがあるということが指摘されるようになってきた（Trudgill, P. *Sociolinguistic Typology*, 2011 など）。本研究は、これらの成果の上に立って行ったものである。

（３）方言類型と社会的使用状況の連動

主に国外の先行研究によって明示的に述べられたように、それぞれの言語の複雑度は、その言語が使用される社会的状況（話者数、他地域との接触の度合い、人口の流入、成人によって習得される可能性の有無、その言語がたどってきた歴史など）と連動している可能性がある。本研究課題においても同様の考え方を採用し、使用される社会の状況や使用コンテキスト、とくにこれまで経験してきた言語接触の度合いが異なる複数の方言を対象として、複雑性の観点から分析することを目的とした。

（４）人間はどのようにして言語を作り出すのか

本研究課題の究極の目的は、人間はいかにして言語を作り上げるのかということを知るところにある。変異理論や文法化研究などの例外もあるが、言語学の多くの分野では、言語を、完成したコミュニケーションシステムとして捉えることが多い。一方の極にはたしかに、慣習化された構文や語彙など、個人の自由にはならない側面がある。しかしながらまた一方には、話し手が日常的なコミュニケーションを行うなかで、その対者や場面に応じて自由に運用する部分があり（創発的、共創的な部分）、このような部分が長い時間をかけて言語変化として定着するという側面がある。本研究課題は、ある特定の社会状況のもとでの個々のコミュニケーション場面という個別的、流動的な世界から、言語のシステムとして結晶化するところまで、幅広い視野を取りつつも、とくに後者に注目して、言語を構築する主体としての人間の営みを解明することを目標とする大きな研究計画の一環として行ったものである。

３．研究の方法

上述のとおり、本研究課題の目的は、標準語や海外の日本語変種を含めた日本語諸方言を取り上げて、「複雑性」という言語内部の側面と、「言語接触の度合い」という社会的な側面の両者を関連させつつ総覧することにある。そのために、以下のような研究の方法を採用した。

（１）方言の社会的分類

言語接触の度合いという社会的な基準から日本語諸方言を分類し、両極にある以下のタイプを設定する（言語の複雑性を測定する指標が確立していないので、最初に言語的な基準（複雑性）によって方言を分類するという手法は採らない）。

接触方言：その成立に複数の方言の接触ということが大きく関わっている方言や変種（標準語、東京方言、大阪方言、ハワイ日系人日本語変種など）

伝統方言：比較的外部の方言との接触が少なくかつ一定の記述や談話資料（以下データとする）の蓄積がある方言（山形方言、八丈方言、天草方言など）

（２）分析対象方言・変種の選定

上記それぞれのタイプの方言や変種の中からいくつかの方言や変種を試行的に選び出す。

（３）言語的複雑度の測定

上の（２）で選び出したそれぞれの方言や変種のさまざまな言語事象（音素、音節、アクセント、形態、文法カテゴリー等）に観察される複雑度を、一定の指標のもとに測定し、一覧を作成する。この作業において、複雑度を測定する方法や指標を精緻化する。この段階の分析において、方言や変種の情報が不足する場合には、各種文献・通信調査や現地出身の大阪在住者に対する面接調査などによって補う。

（４）言語的複雑度と社会的状況の相関の解明と一般化

上の（３）で測定された複雑度を、当該方言をめぐる過去や現在の社会的状況、とくに言語接

触の度合いとあらためて関連づけて解釈し、言語的複雑性と社会的状況が連動するか否かを検討する。連動する場合には、一般化を目指す。

(5) 分析結果の検証

上の(3)と(4)の作業を行いつつ、一定の知見が得られた段階で分析対象とするそれぞれのタイプの方言や変種を追加し、さらに分析を進めて結果の妥当性を検証する。

(6) 先行研究とのつきあわせによるさらなる一般化

上の(1)～(5)の作業と並行して、国外で行われた当該分野の研究成果と本研究課題の結果をつきあわせ、その異同を確認しつつ、言語形成に作用するさまざまな言語的、社会的要因を解明する。

4. 研究成果

3年間の研究成果は、以下の通りである。

(1) 研究展望

これまでおもに国外で行われてきた、言語の複雑性を社会言語類型論的に分析しようとした研究の、分析対象言語、分析対象言語項目、使用データ、分析の方法と視点、成果、問題点、今後の課題などを一覧にして整理するとともに、研究の流れを明らかにした。また、それを踏まえて、当該分野の進捗状況と課題をまとめる展望論文を執筆する作業を進め、「言語の複雑性研究の現状」(『阪大社会言語学研究ノート』18号、pp.119-144、2021年11月)にまとめた。

(2) 方言間対照研究

おもに、標準語、東京方言、大阪方言、山形市方言の個々の言語的特徴、とくに形態統語的な特徴を比較しつつ、その方言間対照表を作成した。また、それを主たるデータとして各方言の複雑度をはかる指標群を設定し(動詞の活用タイプ、複合動詞、補助動詞、モダリティ形式の分化、音韻規則・形態音韻規則など)、分析を加えた。その結果、日本の方言のうち他方言との接触があまりない伝統的な方言は、独立した文法要素が連鎖するという分析的な特徴を持ちつつも、そこに複雑な音韻規則・形態音韻規則がかぶさって、見かけ上は標準語とかなり異なった形をとりがちであること、一方、都市部の、他方言との接触が多い方言においては、文法要素が音声融合を経つつより文法的な特徴を強くする(文法化を進める)傾向があることなどを明らかにした。この結果は海外の先行研究の主張とは若干異なったものであるが、その理由の解明については今後の課題とした。以上の成果を、「山形市方言における動詞述語の分析性と統合性」(『待兼山論叢 文化動態論篇』55号、pp.1-19、2021年12月)として刊行した。

あわせて、標準語のもつ独自の言語的特徴(多様な方言話者によって使用される接触言語としての特徴と、公的・学術的な目的のために使用される公用言語としての特徴)を、各地の方言のそれと対照しつつ整理する作業を進め、その成果を「ボトムアップの標準化」(高田博行・堀田隆一・田中牧郎編『言語の標準化を考える 日中英独仏「対照言語史」の試み』大修館書店、pp.38-61、2022年6月)としてまとめた。

(3) 研究者との対話

以上の研究成果の概要を、「言語の形成過程をめぐる社会的類型化は可能か」(第4回歴史社会言語学・歴史語用論研究会(オンライン)、2021年3月12日)及び「言語変化と社会」(NINJALコロキウム(オンライン)、2022年1月11日)において発表し、参加者と情報、意見の交換を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渋谷勝己	4. 巻 18
2. 論文標題 言語の複雑性研究の現状	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 阪大社会言語学研究ノート	6. 最初と最後の頁 119-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/86408	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渋谷勝己	4. 巻 55
2. 論文標題 山形市方言における動詞述語の分析性と統合性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 待兼山論叢 文化動態論篇	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渋谷勝己	4. 巻 38-12
2. 論文標題 「裏側」のことば	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渋谷勝己	4. 巻 -
2. 論文標題 ボトムアップの標準化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高田博行・田中牧郎・堀田隆一編『言語の標準化を考える』大修館書店	6. 最初と最後の頁 38-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渋谷勝己
2. 発表標題 言語変化と社会
3. 学会等名 第119回NINJALコロキウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渋谷勝己
2. 発表標題 言語の形成過程をめぐる社会的類型化は可能か（中間報告）
3. 学会等名 歴史社会言語学・歴史語用論研究会第4回研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------